英語科編16

第116号
平成22年1月25日

番外　不明

小沢　準作　山梨県出身大10東高師卒　在職大正14　大東文化大教授

「在職図表」を見ると、小沢準作の名前がありません。しかし、大正14年の『附属中学校一覧』を見ると、小沢の名前がでてきます。そして、その一年後の『一覧』にはでてきません。一年間の専任であったか非常勤であったか不明の教官です。後年の略歴を見ると、大東文化大学の教授になっています。

29　パーマーを受け継ぐ

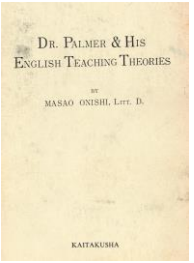
黒田　巍　和歌山県出身　大14東高師卒　在職大15～昭4　東高師教授

パーマーの来日は、日本の英語教育者に大きな影響を与えましたが、附属中学の教官の中で、もっともパーマーの教授法に習わんとしたのは黒田巍のようです。

このころの附属中学の各教科の教授内容については、昭和2年につくられた『東京高等師範学校　附属中学校　教授細目』という、現在となっては非常に貴重な書籍がありますが、それを見ると、英語科については次のようになっています。「下級に於いては、先ず読本を開いて英文を読ませる前に、その内容について十分口頭の練習をして置く。英語を常に耳にし口にすることは、読書力・発表力の基礎となるからである。読本を開いて後の仕事は、口頭練習における説明の不備を補うのであって、語句の意義及文法上の関係等を明らかにすればよいのである。必ずしも全文を邦語に訳し去る必要はない。」このような方針の下、全国にもこの方法を広めるべく、昭和2年には、黒田が全国の先生を参観させながらの模範授業を行なっています。そのときのことを黒田は次のように語っています。

「寺西先生は4年生の英作文をおやりになり、・・・わたくしの授業は、テキストは佐藤保胤先生編纂のセンターリーダーズのもので・・・物語をやさしく言いかえしまして、聞かせて、その後質問に英語で答えさせて、それが終わってから読み方に入り、つづいて、「置き換え」―いまの文法練習をやりました。」

このように、パーマーの仕事は、黒田に受け継がれ、その後、小野達や中山常雄などの若い教官にも受け継がれていきました。しかし、一方昭和2年には、東大教授の藤村作が有名な『英語科処分の急務』を発表し、「英語存廃論」が問題となってきました。これに対し、高等師範学校と附属中学校の英語科では、「我が国中等教育における外国語」を発表して反論をしました。黒田が教官なったころは、英語の受難の時代が始まったときでもありました。黒田巍著『英語教授論考』金子書房　昭和23



30　不明

恵比木義隆　鳥取県出身昭2東高師卒在職昭2～3

恵比木義隆については詳細が不明です。ただし、昭和2年に東京高等師範を卒業して、すぐに附属中の教官になり、41回生の担任を1年か2年までしていたことまでは分かっています。今後の調査が必要な教官です。

31　詳細不明

小野　達　静岡県出身　昭3東高師卒在職3～8　静岡大教授

小野達については、詳細が分かっていません。昭和3年に東高師を卒業するとすぐに附属中の教官となり、恵比木の後を継いで、41回生の担任をしたようです。その後、たぶん岡崎師範の教官を勤め、昭和42年度の名簿によれば、静岡大教授・付属浜松中学校校長を勤めています。

32　佐渡遭難事件の引率

中山　常雄東京出身昭4東高師卒在職4～23

昭和6年4月1日、佐渡金北山において、附属中学校の山岳部が突然の雪混じりの風雨により、山中で行方不明となり、その結果、生徒2人、現地の案内人1人が死に至ったことは、当時、大きな事件として新聞報道もされました。この時のパーティは、生徒18人、現地案内人2人で、付き添いの教官が、理科の山口俊夫、英語の山中常雄で、合計で22人でした。なぜ、この事故がおこったかについては、さまざまな条件が重なったためのようですが、登山経験で考えると、初めて登山をしたのは、生徒20名のうち、3名だけで、特に大きな問題はなかったようです。引率をした山口・山中もまだ若く、体力的には特に問題ないようでした。

不幸な事件としてしか言いようのない事故でしたが、その後、遭難現地には左にあるような遭難碑が建てられ、80年後の今日においても、佐渡の人々の手でしっかりと管理されています。佐渡にある「福島・大島君記念碑」。

君雨島大・島福碑念記難遭
桐除会雑誌96号より

この遭難にかんする新聞記事は、昭和6年四月三日の東京朝日新聞夕刊、また、日本山岳会機関誌「山岳」1931年12月第26年3号に遭難概報、そして校内では、「福島・大島君追悼記念誌」が発行されています。

ところで、中山の英語教官としての立場は、昭和に入って嘉納の提唱でつくられた中等教育研究会発行の『中等教育研究』にいくつか発表されています。そのうちの一つ「中等学校に於ける英語初歩教授に就いて」（第4巻1号）で、中山は、パーマーのダイレクト・メソッドを受け継ぎ、絵のカードを用いて授業などを実施することなどを提案しています。そして、彼の実施した授業・及び授業案そのものも、第5巻2号に載せられ、英語科教官だけでなく、全附属中教官により、授業検討がなされています。昔から、附属中では、授業研究がなされてきたことが『中等教育研究』でわかります。